

マンダラぬりえを用いた色彩教育の心理的効果に関する調査・分析

○小川 直茂(岐阜市立女子短期大学) 藤田 篤(日本知育玩具協会)

1.はじめに

近現代に幼児を中心とする多くの対象者に親しまれてきた塗り絵は、明治時代に図画教育の中で用いられた絵手本に端を発している(注 1)。その後、塗り絵は玩具として一般に普及し、近年では大人を対象とした細密な図案の塗り絵が人気を博すなど、年代を問わず幅広い支持を得ている状況にある。

教育用途としての塗り絵に対する社会的な認識の変遷を見てみると、「下絵となる図案があらかじめ描かれているため、制作者の描画力の優劣に左右されずに配色を体験でき、色彩感覚を育てることができる」といった肯定的意見がある一方で、「下絵の図案によって制作者の自由な発想や表現が阻害される」といった否定的な意見も見られ、教育における導入について賛否が分かれる状況が続いてきた。

塗り絵の教育利用に関する否定的意見の内容に注目すると、下絵の図案が有する具象性によってもたらされる影響が大きいと考えられた。そこで筆者らは、幾何学的な図形構成による抽象柄を図案とする「マンダラぬりえ」(注 2)が、従来の塗り絵の教育的デメリットを解消する可能性があると考えた。2019年6月から7月にかけてデザイン分野を専攻する短期大学生66名に対してマンダラぬりえを題材とする配色演習課題を実施し、制作プロセスと成果物について印象を尋ねたところ、アイデア発想の自由度が一定程度担保されている状況が確認され、「制作者の自由な発想の阻害」の問題解決に向けて良好な結果が得られた。それに加えて、課題制作時の楽しさや成果物に対する満足度について従来の配色演習よりもポジティブな反応が見られた。これらの調査結果の詳細については、拙稿『色彩教育における「マンダラぬりえ」の活用に関する分析・考察」(注 3)を参照いただきたい。

2.研究目的

本研究では、先行研究の調査をベースに更なる追跡調査を行い、マンダラぬりえの教育利用における心理的効果、およびその効果と形態的特性の関係性について知見を深めることを目的とする。

3.調査手法

2020年8月に調査を実施した。対象はデザイン分野の短期大学に在籍する1年生61名である。

1年次の必修科目である「色彩学」の授業で、演習課題を出題した。課題のテーマは「四季の表現」とし、同じ図案を使用して春/夏/秋/冬の4種の季節を想起させる配色作品を制作するよう指示した。作品制作に用

いる図案として、マンダラぬりえを含む4種類の抽象的図案(図1)を提示し、いずれか1種類を選択して使用する形とした。図案のバリエーションはマンダラぬりえの形態的特性である対称性/円環性/中心性を考慮して作成しており、①対称性だけを有する図案 ②対称性と中心性を有する図案 ③対称性/円環性/中心性のいずれも有しない図案 ④対称性/円環性/中心性の全てを有する図案(マンダラぬりえ)となっている。図案の選択や作品の配色表現に関して教員の助言や中間指導は実施せず、学生それぞれが自身の意志にもとづき図案を選択し、配色表現を行うよう配慮した。

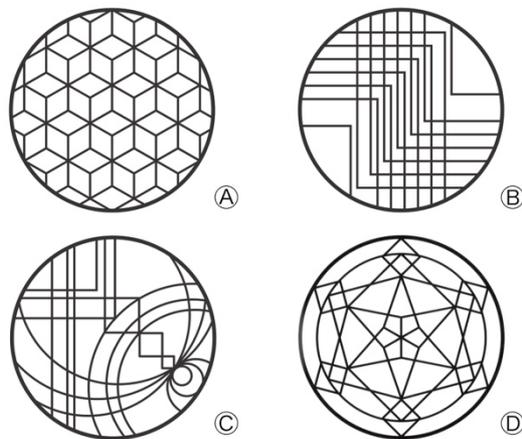


図 1.4 種類の抽象的図案

課題作品の提出後、演習課題の印象に関するアンケート調査を行った。アンケート調査項目は Q1.どの図案を選んだか Q2.図案を選んだ理由 Q3.制作時は楽しかったか Q4.制作時に集中して取り組めたか Q5.作品の出来に満足しているか の5点である。Q2は「図案が好みだった/アイデアが思い浮かびやすかった/きれいに仕上げられそうだった/早く仕上げられそうだった/楽しそうだった/簡単そうだった/やり甲斐がありそうだった/その他」の計8項目から該当する内容を選択する方式(複数回答可)とし、Q3~5はそれぞれポジティブな回答からネガティブな回答まで5段階で回答する形式とした。これらの調査結果を集計し、各図案に対する印象を比較することで、マンダラぬりえを用いた色彩教育の心理的効果を明らかにするよう試みた。なお、本アンケート調査は無記名方式で行い、個人が特定できないよう匿名性を担保した上で実施した。

4.調査結果

4.1. 図案の選定(Q1)

61名の図案選択状況は、①17名 ②1名 ③24名

①19名だった。②は他の図案と比べて選択者が著しく少なかったため、比較調査の対象から除外し、③④⑤の3種の図案を選択した各グループに対する印象調査結果を比較することとした。

4.2. 図案の選定理由(Q2)

①グループの回答者が最も多く選択したのは「アイデアが思い浮かびやすかった」で、グループの82.4%(14名)が選択していた。次いで「図案が好みだった」64.7%(11名)、「楽しそうだった」41.2%(7名)、「きれいに仕上げられそうだった」23.5%(4名)、「やり甲斐がありそうだった」17.6%(3名)、「早く仕上げられそうだった」11.8%(2名)、「簡単そうだった」および「その他」5.9%(各1名)の順となった。

②グループの回答者が最も多く選択したのは「図案が好みだった」で、グループの79.2%(19名)が選択していた。次いで「楽しそうだった」54.2%(13名)、「アイデアが思い浮かびやすかった」33.3%(8名)、「きれいに仕上げられそうだった」20.8%(5名)、「やり甲斐がありそうだった」20.8%(5名)の順となった。

③グループの回答者が最も多く選択したのは「図案が好みだった」で、グループの63.2%(12名)が選択していた。次いで「アイデアが思い浮かびやすかった」57.9%(11名)、「きれいに仕上げられそうだった」42.1%(8名)、「楽しそうだった」36.8%(7名)、「その他」10.5%(2名)の順となった。

④グループは他の2グループと異なり「アイデアが思い浮かびやすかった」が最多回答で、かつ「早く仕上げられそうだった」「簡単そうだった」などの回答も少数ながら見られる。④の図案は種類の図形のみを用いたシンプルな形状であり、アイデア発想が比較的容易な点が選定理由に影響したものと推察される。

⑤グループは他のグループと比較して「やり甲斐がありそうだった」の出現率が高く、「アイデアが思い浮かびやすかった」の出現率が低い。図案は非対称で複雑な構成だが、そうした図案の複雑さをやり甲斐と捉え、難易度の高い課題を好む層が選定したのではないかと考えられる。

⑥グループは他のグループと比較して「きれいに仕上げられそうだった」の回答出現率が高い。対称性/円環性/中心性の要素が揃ったマンダラぬりえの図案が持つ秩序性が、美しい完成予想への期待を誘発する契機になった可能性が考えられる。

4.3. 制作時の楽しさに関する印象(Q3)

いずれのグループでもネガティブな回答はほとんど見られなかった。もっともポジティブな回答(楽しかった)の回答出現率を比較すると、①グループが52.9%(9名)、②グループが45.8%(11名)、③グループが57.9%(11名)だった。マンダラぬりえを選択した④グループが、制作時の楽しさを最も顕著に感じていたことが分かった。

4.4. 制作時の集中度合いに関する印象(Q4)

Q3と同じく、どのグループでもネガティブな回答はほぼ見られなかった。もっともポジティブな回答(集中でき

た)の回答出現率は、①グループが64.7%(11名)、②グループが45.8%(11名)、③グループが63.2%(11名)だった。①グループおよびマンダラぬりえを選択した④グループが、②グループと比較して良好な反応を示していた。

4.5. 成果物への満足度に関する印象

もっともポジティブな回答(満足している)の回答出現率を比較すると、①グループが0.0%(0名)、②グループが16.7%(4名)、③グループが26.3%(5名)となった。マンダラぬりえを選択した④グループが、他の2グループと比較してポジティブな回答の出現率が顕著に高い結果となった。

一方、ネガティブな回答(満足していない/あまり満足していない)の出現率は、①グループが17.6%(3名)、②グループが8.3%(2名)、③グループが21.1%(4名)であった。④グループはポジティブ/ネガティブ共に他グループよりも出現率が高くなっていた。

5. 考察・まとめ

本研究では、「抽象柄の図案を下絵に用いた塗り絵方式の配色演習」という課題制作の基本条件を揃えた上で、図案の形態的特性に複数のバリエーションを用意し、各図案を自発的に選択した制作者に対して、制作プロセスおよび成果物への印象に関する比較調査を行った。その結果、前回の調査結果と同じく「制作時の楽しさ」「成果物への満足度」についてマンダラぬりえの評価が高くなる傾向が見られた。このことから、マンダラぬりえの形態的特性が色彩教育における心理的モチベーションの維持及び向上、達成感創出に寄与している可能性が高まったと考える。

一方で、Q5の成果物への満足度に関する印象では、マンダラぬりえを選択した④グループの回答がポジティブ・ネガティブの両方向に二極化してあらわれる傾向も確認された。この要因に関する分析は今後の研究課題とし、さらなる考察のため調査対象の拡大や調査方法の詳細検討に取り組んでいきたい。

【謝辞】

本研究の一部は、一般財団法人越山科学技術振興財団および公益財団法人小川科学技術財団の研究助成を受けて実施されました。研究活動へのご支援に心より感謝申し上げます。

【注・参考文献】

- 1) 多田敏捷(編): おもちゃ博物館14 うつし絵・着せかえ・ぬり絵, 京都書院, 1992
- 2) スザンヌ・F・フィンチャー(著), 正木晃(訳): マンダラ塗り絵, 春秋社, 2005
- 3) 小川直茂, 藤田篤: 色彩教育における「マンダラぬりえ」の活用に関する分析・考察, 日本保育学会第73回大会 概要集, pp.2151-2152, 2020